第２　教育研究団体の意見・評価

○　全国歴史教育研究協議会

（代表者　池　口　康　夫　　会員数　約16,200名）
ＴＥＬ　03-3393-1331

１　は　じ　め　に

今年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の分析を終えて、ここ数年来の傾向を継承し、問題の内容やレベルともに教科書に準拠していると考える。高等学校での通常授業で対応できるようになっていることは、センター試験の本質を踏まえたものとして、あるべき方向に進化していると考える。その一方で、解答するに当たって、ほとんどの設問が、リード文や図によらず、文章だけから、「世界史」の知識・理解で解答できる傾向があることは改善の必要があると考える。

学力の３要素として、学校教育法第30条では「基礎的な知識及び技能」「思考力・判断力・表現その他の能力」「主体的に学習に取り組む態度」をあげている。これらを高等学校「地理・歴史」にあてはめてみると、歴史的事象を時間軸や空間軸など多元的な観点を踏まえた視点から検討し、複数の事象間の関連や因果関係を考察することが求められる。また、歴史的事象についての様々な解釈を比較して、どちらにより客観性や妥当性があるかを考えること、すなわち、歴史的思考力を涵養（かんよう）することも求められる。センター試験では、基礎的な知識の確認はなされているが、思考力・判断力の確認、すなわち歴史的思考力を発揮して解答に至るような問題に昇華させるという点においては今後の課題であると考える。現状で、出題者の方々が意欲的にテーマ設定やリード文作成に挑まれていることは、十分に読み取れる。今後の充実に向けて、リード文を熟読する中で解答のかぎが引き出されるような思考力を問う設問やリード文の全文を読まなければ解答できないテーマ性を重視する設問などを、開発していくことが肝要と考える。是非、今後も継続課題としていただきたい。また、地理と歴史の融合という観点で、写真、図や表なども、マークシート方式という制約はあるが、工夫して出題することも考慮していただきたい。センター試験は、歴史的思考力が問われ、歴史教育の蓄積を反映するものであるべきと強く願っている。

以下、今回のセンター試験「世界史Ａ」と「世界史Ｂ」の試験問題について、限られた紙面の中ではあるが、御検討の一助となることを願って、本協議会としての意見と評価を記す。

２　試験問題の程度・設問数・配点・形式等

⑴　「世界史Ａ」について

昨年度同様、「世界史Ｂ」との共通問題はなく、大問３題、小問33問であった。

時代別の出題は、選択肢から判断すると、前近代が４問、前近代と近代にかかわるものが２問、近代が17問、近代と現代にかかわるものが１問、現代（高等学校学習指導要領「⑶現代の世界と日本」に該当する部分）が７問、うち昨年は10問だった第二次世界大戦後史が５問、前近代と近代と現代にかかわるものが２問であった。昨年より近代部分の出題が多くなったが、現代部分の出

題がやや低くなった上に、戦後史は減少した。現代部分の出題が減少したのは残念だが、「近現代史を中心とする」高等学校学習指導要領の目標にほぼ合致した出題であると考えられる。分野別では、政治史の知識・理解を問う設問が24問と大きな割合を占め、文化史が４問、その他に、文化・経済の混合が２問、経済が３問で、経済史がやや増加した。地域別では、非ヨーロッパ世界は14問、欧米関係が13問、全地域にかかわるものが６問である。なかでも中国やアメリカ合衆国にかかわる設問が多かった。昨年と比較すると、非ヨーロッパ世界が増加し、全地域にかかわるものが微減した。

問題形式では、正しい文を選ぶ設問が10問、誤った文を選ぶ設問が２問、波線部の正しいものを選ぶ設問が１問、波線部の誤っているものを選ぶ設問が１問、地名と地図上の位置の組合せが２問、人名や地名と文の組合せが２問、リード文中や設問で新たに掲げられた文の空欄に適語を補充する設問が３問、二つの文の正誤の組合せが３問、年表中の位置を選択する設問が２問、語句選択が４問、年代整序が２問であった。６択問題は２問出題された。誤った文を選ぶ設問が減少し、様々な組合せを問う設問や地図にかかわる設問が増加した。

地図が３点、図版が２点使用された。また、グラフなどの統計資料や史料は用いられなかった。

語句選択や空欄適語補充の設問が多いが、全体的に昨年よりやや難しめの問題であった。

第１問　「歴史上の帝国や、帝国主義について」

Ａは、清朝がテーマである。問１は、清朝の皇帝の名と、彼の事績やその治世化に起こった出来事についての組合せの設問である。マカートニーについて記載のない教科書もあるが、光緒帝の時代をきちんと学習していれば解答可能。問２はネルチンスク条約が締結された当時のロシア皇帝の名の４択である。前高等学校学習指導要領ならば、⑵諸文明の接触と交流で同時代史を学んだので、容易に解答できたであろうが、現行高等学校学習指導要領にのっとって学習する場合はやや厳しかったかもしれない。問３はモンゴルからジュンガル・回部の歴史に関する２文正誤問題。ｂの文は新疆「省」が誤りであろうが、これで誤文と判定させるのは酷であろう。２文正誤問題は、４択問題よりも難易度が高くなる。それを認識した上での出題であろうか。次年度以降、是非改善していただきたい。問４は清朝の文化政策や清代の文化についての４択問題である。②の『三大陸周遊記』や③の李白は扱われていない教科書もある。また、バットゥータは第２問の問１でも扱われている。作問に当たっては同一冊子になるべく事項が重複しないことが理想と考える。次年度は気を付けていただきたい。

Ｂは、オスマン帝国がテーマである。問５は、オスマン帝国の支配下に入った都市の地図上の位置を問う設問。オスマン帝国の領域の地図はほとんどの教科書に掲載されており、日常地図を利用して空間的な把握を図りつつ学習しているかを測る良問である。問６は税や税制の歴史に関する４択問題である。両税法や関税と貿易に関する一般協定（ＧＡＴＴ）は記載されていない教科書もあるが、②の選択肢が明確で、多くの教科書に記載されている事柄なので、受験者は戸惑わずに解答できたであろう。問７はイェニチェリについての設問である。「世界史Ｂ」を選択している受験者ならば、理解している者も多いだろうが、「世界史Ａ」としては詳細すぎる。出題者は波線のみ判定すればよいのだから、と考えているかもしれないが、受験者は知らない事柄を試験会場で見ると、多くの者はかなり冷静さを失う。そうしたことからこの設問は受験者の力を適正に判定する設問とは言えない。また、ある教科書には選択肢すべての

内容が記載されていた。出題に当たっては多くの教科書に当たって作問していただきたい。問８はスレイマン１世の事績についての４択問題。①のサン＝ステファノ条約は掲載されていない教科書があり、やや難しかったであろう。

Ｃは、アメリカ合衆国がテーマである。問９は文章中の空欄に入る地域の名と、その地に起こった出来事についての設問。これはリヴィングストンが掲載されていない教科書もあるが、中学校で学習した「ハワイの真珠湾攻撃」を習得していれば解答できるので、良問と考える。問10は歴代アメリカ合衆国大統領の在任中に起こった出来事についての問いで、「世界史Ｂ」としては標準的な設問であるが、「世界史Ａ」としてはいかがであろうか。特に、第二次世界大戦後については、「世界史Ａ」の教科書では大統領名をあげない場合が多い。「世界史Ｂ」的な感覚の設問である。問11は建築に関する年表中からエンパイア＝ステートビルが完成した時期を選択する設問である。リード文を丁寧に読み、第一次世界大戦後の1920年代頃であると推測して解答を導くので、受験者の思考力が測れる良問である。

第１問の設問はバラエティに富んでおり、その点は評価できる。

第２問　「歴史上の港町について」

Ａはカリカットがテーマである。問１は、イブン＝バットゥータについての４択問題である。イブン＝バットゥータについても各教科書は記述がまちまちの上、第１問の問４の②の選択肢と本問の④の選択肢は裏表の関係で、適切な出題とは言えないだろう。問２はムスリム商人に関する文中の空欄と地図上の位置の組合せを選ぶ設問である。多くの教科書に掲載されている鄭和の艦隊に関する地図を確認しておけば、ｂがマリンディであることは容易にわかるであろう。地図には大きな河川も示され、またリード文にあるカリカットも示されており、丁寧な作りの良問である。問３は、鄭和の艦隊について述べた４択問題。①に「鄭和はヒンドゥー教徒」とあるが、鄭和がムスリムであることは世界史Ａの教科書にはあまり掲載されていない。④の「西アフリカに到達した」は問２の地図を参考にすることができるが、やや難しかった。問４はヨーロッパ諸国のアジア進出の家庭について述べた文の年代整序問題。出題者は単純にポルトガル→オランダ→フランスの順で進出してくると考えたのかもしれないが、受験者にはもっと複雑な設問に感じられたのではないか。受験者が年号暗記に走りかねない設問である。

Ｂはヴェネツィアがテーマである。問５はヴェネツィアについての文の空欄に入る語句の組合せ問題。教科書には第１回十字軍のことはほとんど掲載されていない。先程も書いたが、受験者は「初見」に弱い。出題者は「ビザンツ帝国の首都」を答えればよいと考えて作問したかもしれないが、受験者は「第４回十字軍」をみて、「知らない」と混乱する者もいたであろう。「世界史Ａ」は標準単位が２単位であることをよくよく認識して作問していただきたい。問６は南京条約によって開港された中国の港の名と、その位置を選ぶ設問。河川はあえてはずしてあるのだろう。日ごろから地図を利用して空間的な把握に努めているかを測る良問。問７は14世紀に起こった出来事についての４択問題。フェリペ２世とグラナダ占領については触れられていない教科書がある。問８はパナマ運河が開通した時期を年表中の時期より選択する設問。これも本文には記載がない教科書が多く、またここでパナマ運河の開通を問う意図もよく分からない。

Ｃはボルドーがテーマである。問９は、18世紀の大西洋貿易について述べた文中の空欄に対する適語補充の組合せ。大西洋三角貿易については、ほぼどの教科書にも図版が掲載されており、標準的な出題である。問10は河川にかかわる出来事についての４択問題。扶南やアイグン条約の内容は掲載していない教科書もあるが問11ジロンド派についての４択問題。フロンドの乱は掲載していない教科書がある。

第２問のリード文はいずれも意欲的で、興味深く、授業でも利用したい内容であった。また、地図を使用し、受験者の空間的な把握を問う問題が２問出題されたことも好感が持てる。

第３問 「歴史上の革命及び政党・結社について」

Ａはナポレオンとウィーン体制がテーマである。問１は文章中の空欄に対する適語補充の組合せで、標準的な出題。問２は、ナポレオン＝ボナパルトの事績についての４択問題。ティルジット条約締結は掲載されていない教科書もある。問３は、20世紀の政治的指導者についての４択問題である。「世界史Ａ」の教科書では、「世界史Ｂ」の教科書に比較して本文中に人名が記載されていないことが多い。特に④の判定は難しかったであろう。問４は七月革命を題材にした問題に示されている絵の作者を選択する設問である。多くの教科書にこのドラクロワの絵は載っているので、標準的な出題であり、受験者に図版を含めた多角的な学習を促す良問である。

Ｂは「ソヴィエト」がテーマである。問５は、二月（三月）革命後に起こった出来事について述べた三つの文の年代整序問題。「人物」が「どうした」の文となっているが、「世界史Ａ」の教科書の本文中には「世界史Ｂ」に比べて人物が登場するのは少ないことを重ねて申し上げておきたい。特に、ケレンスキーで戸惑う受験者がいたと思われる。問６は第一次世界大戦についての４択問題。これは標準的な出題。問７はソヴィエト連邦成立後に起こった出来事。これは歴史の流れを大づかみしていれば解答できる良問である。問８は共産党や共産主義をめぐる出来事についての２文正誤問題。コミンテルンについては言及がない教科書がある。

Ｃは第一次世界大戦前後の中国がテーマである。問９は中国同盟会が結成された場所を選択する設問。これも意外なことに記載がない教科書が存在する。問10魯迅についての４択問題。『天工開物』や『阿Ｑ正伝』は記載がない教科書がある。問11は中国共産党についての２文正誤問題。ａの文のコミンフォルムは、問８のａの文のコミンテルンと入れ替えるといずれも正文となるが、事項が重複している。同じような内容を問うことにどのような意味があるのだろうか。また、コミンフォルムも掲載がない教科書がある。

第３問は全体的に近代や現代にかかわる設問が多かった。

最後に全体を通して。今年も、高等学校学習指導要領の「⑶現代の世界と日本」に該当する内容の出題が多かった。ただし、教科書本文にほとんど掲載されていない事項が正答となることはやはり避けていただきたい。また、人物そのものに関して問う設問が５問あり、その他にも人物にかかわる出題が多かったが、「世界史Ａ」の教科書では案外、コラムでは取り上げられていても、本文には人物が取り上げられていないことが多い。過去の「世界史Ａ」の問題を思い起こしても、これほど人物そのものを問う問題はなかったように記憶している。一工夫お願いしたい。

何度もお願いしていることであるが、「世界史Ａ」を作問される先生には高等学校学習指導要領

を熟読の上、各社の「世界史Ａ」の教科書を精査して上で作問に当たっていただきたい。「世界史Ａ」での受験者は「世界史Ａ」専用の参考書などがほとんどないなかで、教科書のみで学習する場合が多いと考えられる。一方、「世界史Ａ」の教科書は、「世界史Ｂ」に比べて各社の特色が色濃くでており、記述内容は様々であり、取り上げられている事項も異なる。単位数の少ない「世界史Ａ」の作問は大変困難であることは承知しているが、是非とも「世界史Ａ」で受験する生徒の立場に立った問題を望む。

⑵ 「世界史Ｂ」について

今年度も、大問が４問、高等学校学習指導要領を反映して大問ごとにテーマ設定がなされている。各大問とも３問からなる三つの小問に分かれ配点が25点、計36問で100点であり、ここ数年間の出題傾向を踏襲し、「世界史Ａ」との共通問題はなかった。

出題を時代別に見ると、正答となる選択肢から判断するに、古代にかかわるものが３問、中世にかかわるものが８問、近世にかかわるものが９問、近代にかかわるものが９問、現代にかかわるものが４問、古代と中世にかかわるものが１問、古代と近世にかかわるものが２問であった。また地域別に見ると、東アジアにかかわるものが８問、南アジアにかかわるものが１問、西アジアにかかわるものが３問、ヨーロッパにかかわるものが13問、アフリカにかかわるものが２問、北アメリカにかかわるものが５問、南アメリカにかかわるものが１問、東アジアとヨーロッパにかかわるものが１問、東南アジアと南アジアにかかわるものが１問、西アジアとヨーロッパにかかわるものが１問であった。

出題形式で見ると、文章の正誤文を選ぶものが23問（うち誤文を選ぶものが６問）、穴埋め語句の組合せを問うものが２問、昨年度には見られなかった年代整序が３問、文章の正誤の組合せを問うものが７問、王朝とその位置を問う地図問題が１問であった。

第１問 「メディアを通した情報伝達」

Ａでは、パピルスに書かれたローマ帝政期の手紙に関連して出題されている。問１は、エジプトに関する年代整序問題。ａが前４世紀、ｂが７世紀、ｃが前１世紀と時期が離れており判断しやすい。問２は、古代ローマにおける土地経営に関する文章中の二つの空欄を埋める問題。イに相当する語として「ヨーマン」「コロヌス」「ユンカー」と明確に時代・地域がことなるものをあげており、判断しやすい。問３は、古代ギリシア・ローマ文化に関する４択問題であるが、受験者に対しリード文から世紀を読み取り、かつその世紀（２世紀）に存斬しないもの（３世紀以降に書かれたもの）を選び出すという作業を求めるという、単に知識だけを答えさせるのではなく正解に至る思考を要する良問である。問題文がきちんと読み取れずに間違えた受験者も多いかと思われる。

Ｂでは、近世のイギリスの古文書と印刷物に関連して出題されている。問４は、16世紀のヨーロッパの社会・経済についての正文選択問題。問５は、グーテンベルクによる印刷術の改良と製紙法の改良に関する二つの文章の正誤を判断する問題。問６は、イギリス革命に関連する年代整序問題。年代の近い項目もあるが、イギリス革命の経過を理解していれば正解は容易であろう。Ｂのリード文であげられた写真が世紀を導くだけに用いられている点はいただけない。例えば、図ａについては、問題に関連する史料の写真とその訳文、図ｂについてはグーテ

ンベルクの聖書などを用いて、写真等を見なければ解けない問題にできないだろうか。

Ｃでは、メディアが政治宣伝の手段に利用されてきた側面に関連して出題されている。問７は、19～20世紀の情報伝達手段の発達についての正文選択問題。正解は明確だが、あまり問われることのない分野に戸惑う受験者がいたかもしれない。問８は、歴史上のスローガン等についての誤文選択問題。いずれの選択肢もよく知られたもので解き易い。問９は、アジア・アフリカ地域への列強の進出についての正文選択問題。いずれも標準的な問題である。

第２問 「世界史上の宗教」

Ａでは、「新大陸」でのキリスト教の布教に関連して出題されている。問１は、マニ教とギリシア正教に関する正誤組合せ問題。問２は、カリブ海地域やアメリカ大陸に関する正文選択問題。問３は、16世紀後半の出来事についての正文選択問題。いずれも判別しやすく標準的な問題である。

Ｂでは、進化論に関連して出題されている。問４は、古代から現代に至る科学者や知識人に関する正文選択問題。パグウォッシュ会議は科学者と社会のかかわりを考える上で重要な事項だが、戦後の文化史は受験者の苦手とするところだろう。問５は、キリスト教徒の事跡についての正文選択問題。いずれも判別しやすい。問６は、合衆国の外交政策に関する年代整序問題。いずれも基本的項目であり、判断しやすい。

Ｃでは、中国史上の宗教に関連して出題されている。問７は、仏教に関する正文選択問題。誤文が明確であり解答しやすい。問８は、中国の社会や経済についての正誤組合せ問題。ｂの郷紳については戸惑う受験者が多かったであろう。問９は、東アジアにおける宗教と政治権力の関係についての正文選択問題。判別はしやすい。

第３問 「世界史上の暦」

Ａでは、西アジア・北アフリカの暦に関連して出題されている。問１は、ユダヤ教徒に関する正文選択問題。問２は、ヒジュラについての正文選択問題。問３は、税務・財政に関する正文選択問題。いずれの問題も標準的である。

Ｂでは、フランスの革命暦に関連して出題している。問４では、グレゴリウス暦とその種類について組み合わせた問題。問５は、フランスの王や王朝についての正文選択問題。問６は、19・20世紀の農業・農民についての誤文選択問題。いずれも標準的な問題である。

Ｃでは、中国の暦に関連して出題されている。問７は、暦にかかわる正誤組合せ問題。問８は、中華民国に関する正文選択問題。問９は、プロレタリア文化大革命に関する正文選択問題。いずれも標準的な問題である。

第４問 「歴史上の異文化接触」

Ａでは、ウイグルなどトルコ系遊牧民に関連して出題されている。問１は、ウイグルについての標準的な正文選択問題。問２は、世界史上の商業・交易に関する誤文選択問題。④のＮＡＦＴＡに関する記述に迷う受験者は多いであろう。問３はセルジューク朝とその位置を問う標準的な地図問題。

Ｂでは、中世のイベリア半島に関連して出題されている。問４は、20世紀のスペインについての正文選択問題。問５は、ヨーロッパ中世の文化の広まりに関する誤文選択問題。問６はヨーロッパ中世の農民や手工業者に関する正誤組合せ問題。いずれも標準的な問題。しかし、

トレドの写真が問題になんら関係しない点はいただけない。

Ｃでは、15・16世紀のインドに関連して出題されている。問７は、インド文化に関する文章中の二つの空欄を埋める問題。問８は、15・16世紀に起きた戦争についての標準的な正文選択問題。問９は、ヴィジャヤナガル王国とマドラスについての正誤組合せ問題。ヴィジャヤナガル王国の成立期を問うのはやや難か。また、ここでも写真が単なる参考にとどまっているのはいただけない。

例年指摘しているように、入試問題に求められているのは、落とすための問題ではなく、受験者の高等学校における学習活動や成果が評価されるような問題であり、本稿におけるセンター試験問題の評価もかかる視点によるものである。今年度も昨年度同様、高等学校学習指導要領や教科書の記述量に比例した問題の配分に充分配慮された出題であることと、出題の形式・内容について、全体的に奇をてらうことなく受験者に対して親切で問題が出題されていることがおおいに評価できる。リード文もよく練られており、受験者に対して歴史的な考え方を喚起するような文章になっていて好ましい。例えば、第１問のアピオンの手紙に関する問３は、丁寧に問題文を読み考えないと正解が導けず、受験者の思考力を問う良問であると考える。しかしながら、第１問のＢ、第３問のＣ、第４問のＢの写真がいずれも問題に直結せず単なる参考・興味付けになってしまっていることには、作問について工夫の余地があろう。配点に関しても、３点の問題が28問、２点の問題が８問であった。この８問の形式・難易度は一定ではなく、３点の問題との軽重が明確でない。

今年度の「世界史Ｂ」の平均は61.46点で昨年に比べ1.84点上がった。この要因としては、東南アジア・アフリカ・ラテンアメリカなど、受験者が苦手とする分野に関する出題が減ったことがあげられる。しかしながら、出題形式で「組合せ」や「年代整序」の問題が増えたことが、平均点の上げ幅を抑えたことが予想される。今年度の「世界史Ｂ」の受験者は88,303人で、２年連続で3,000人近く減少した。2009年度まで増加傾向にあったことを考えると、2008年度の平均点の大幅な低下の影響が未だに続いているものと考えられる。昨年度も申し上げたように、「世界史Ｂ」に限らず、平均点の変動は受験者にとっては死活問題である。３点（＝１問）程度の変動は誤差の範囲内であると思われるが、作問に際しては充分に配慮していただきたい。

センター試験は「入試問題のスタンダード」という意味合いを持つ。この意味においても、今年度は出題内容の適正な配分、適正な難易度の出題に、充分ご配慮をいただいていると判断する。次年度以降も同様に留意していただきたい。

３　ま　と　め

今年のセンター試験が、例年どおり、高等学校における日常の教育活動を踏まえた上で作問されており、取り上げられたテーマが世界史の学習において示唆に富むものであることは高く評価できる。

その一方で、例年と同様、知識・理解を問う設問が多く、また「世界史Ａ」においては、科目の性格・特性からやや離れた出題も見られた。問題の作成に当たっては、多種多様の制約があり、意欲的な取組も簡単ではないということは推察した上で、あえて評論を加えた。それは、このセンター試験が入学試験のスタンダードとして、全国の高校生にとっては「世界」史学習上の極めて重

要な基準になっており、私たち高等学校の指導者にとっても、授業の内容・方法等を考える上で、やはり重要な参考資料として受け止めているからこそである。本センター試験が、より一層私たちの教育活動の指針にできるものとなることを願って止まない。

センター試験のより一層の充実を期待して、本協議会の提言としたい。